

低学年児童期 の学習

～保護者のみなさまへ～



第4回

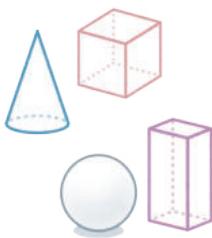
理数系頭脳の育成は3～4年生までに！



児童期までの学習においてはできるだけ好き嫌いや得意不得意をつくりないことが大切です。

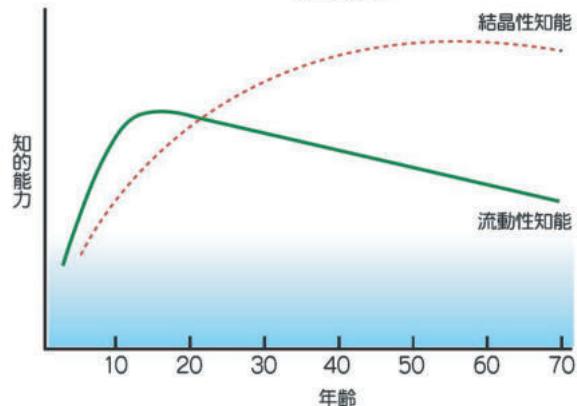
早期から学力に偏りがあると、先々の進路の展望が限定されるだけでなく、子ども自身の内面においても自分に自信をもてなくなったり、コンプレックスを感じたりする原因になりがちです。

たとえば、**国語の読解力不足**は国語だけでなく全ての教科の学習に支障をきたしますから、前回は「**読みの基盤形成**」を低学年期までにしっかり行っておくことをお勧めしました。今回は、「**算数・数学の感覚的素養**」を話題に取りあげてみようと思います。算数・数学は、大学までの長い学校生活における学びの主役となる存在です。この教科に堪能かどうかが、個々の能力の尺度にされることが多く、子どもの自己有能感にも大きな影響を及ぼします。



「あのは人は数学のセンスがある」などという話をよく耳にします。児童期の学習に照らすと、**算数の図形や“速さ”の単元**で求められる能力が、この種の話題に当てはまります。この方面的学習では、考えて問題解決を図る能力（**結晶性知能**）とは別に、瞬間に反応したり識別したりする能力（**流動性知能**）が威力を発揮します。流動性知能は、結晶性知能（言語や思考に関わる能力）が老齢期まで伸ばせるのに対して、9歳前後までにあらかじた伸びしろ”が決まり、誰でも15歳頃をピークにして、あとは年を重ねるにつれて能力値が下がっていく性質をもっています。したがって、流動性知能のレベルを上げ、将来理数系の分野で活躍できる可能性をもたらせるには、この知能の著しい発達が期待できる**9歳前後までの学習**に目を向ける必要があります。

«結晶性知能と流動性知能の発達曲線»
cattell (1987) より



このつづきは、会員限定（会員専用ページ）でお読みいただけます。

●3年部で入会をご検討の場合、個別授業体験をいつでも受け付けております！！

1～3年サンプルや案内資料のご希望もお気軽に！